

「6年生の平均台運動」

牧野 満 (奈良・下田小学校)

1. はじめに

支部例会で実践報告をしなければならないというのが実践を始める一番の理由であるが、ここ数年まともな実践記録を書いていないので、「しっかり授業と向き合って取り組まなければ！」という戒めの気持ちを持って取り組んだのがこの平均台実践である。

それでは、なぜ平均台なのかということであるが、どの様な教材が今受け持っている6年生にふさわしいのかを考えた場合、ある程度技術指導の系統性や教える中身がわかっている器械運動にしようと考えていた。マット運動であれば、連続技づくり、それに採点を加えた授業のイメージがある。マットの実践を考えてみたが、同じ実践を繰り返すのもイマイチ面白味がないので、自分が実践したことのない平均台に挑戦してみようと思った。

どこの学校にある平均台だが、それが教材として活用されるのは、せいぜい低学年の遊具遊びに登場するくらいだろう。体育よりも音楽会で背の低い子がみんなから見えるよう、その台代わりに使われることの方が多い。本来の器械運動としての平均台ではないのだ。きっと、技も限られることや安全面から器械運動としての教材にならないのだろうが、本当に器械運動としての可能性はないのか、その辺りを実践を通して探してみたいと思った。

また、一学期に跳び箱「台上前転～ネックスプリング」を行っており、そこで、技術学習の最後の時間は、発表会と同時に採点を行った。演技の価値(難度)を示し、発表会での演技を選択する。そして、自分が行った演技に評価をする。(但し跳び箱の際は、採点したのは体育係6名だけだったが)このような学習を経験しているので、平均台でもそれを生かせるのではないかと考えた。

以上が平均台の実践に至る動機であるが、初めての教材であるので、大まかには高学年マット運動のイメージはあるものの、思いつくまま様々な内容を子どもに試してきた。実践の途中で一度は心が折れたこともあり、右往左往しながらの実践報告となってしまった。報告から平均台実践の可能性を論議の対象にして頂ければと思う。

2. 平均台で何を教えるか

平均台の実践例が極めて少ないし、器械運動としての報告もほとんどない。それで、改めて、平均台とはどのような運動なのかを実践を始めるにあたって考えてみた。

まず、他の器械運動と比べ、表現する空間が限定されるということである。平均台の解説書にもあたってみたが、ジャンプ、ターン、バランスなど小学生にできる技も限られてくる。しかし、見方を変えれば、限られるからこそ、連続技の組み合わせにより、多様な表現を追求出来るのではない

か。例えば、マット運動では、前転だけでは、単なる簡単な技であるが、そこにジャンプを加えたり前後に他の簡単な技を組み合わせることによって、ハッとする場面(驚異性)が生まれる。平均台では、より連続技としての表現が可能ではないかと思うのだ。単一技の表現と言うよりは、技を組み合わせた連続技の表現に指導の重点を置くべきではないかと考えた。

また、同志会では、単なる連続技づくりではなく、側転を含む連続技の習熟を大きな目的としているが、この側転に相当する核となる技を考えた場合、前転ではないかと考えた。と言うより、ある程度挑戦しがたいのある技は前転しか思いつかなかった。一番気がかりだったのは安全面であるが、幸い本校の平均台は高さが30cmと低く、そこから落ちたとしても大きな怪我には繋がらないだろう。前転を核とした連続技の構成を考え、そこに採点を用いた大まかな授業プランを描いた。

3. 実践の対象児童

6年生34名を対象に行った。学年(136名)には平均台のグループノートを渡しており、学年でも了解を得ている。但し、採点以降の内容は本学級のみ行っている。

受け持った6年生の児童は、大変元気良く、学校の至る所で多くの教師から指導を受けている。下学年でできていたことが、6年生になってできず、乱れてしまう。6年生が育っていない状況は、今の子ども達だけではなく、毎年6年生がそうである。と言うことは、学校の大きな課題の一つであるにも関わらず、6年生が育たない原因を子どもの育ちのせいにする見方がある。学校のきまりを守らせることに必死であり、それができていなかったら悪い子、出来ない子とする子どもの見方である。児童会活動が低調であるため、自分の学校であるとか、学校をこう変えていきたいという学校への帰属意識が極めて低いように思える。低学年のうちから管理下に置かれた教育を受けて、最後の6年で爆発するというのはごく自然な子どもの姿かも知れない。6年生が育たない原因が管理的な教育にあるのだが、そう思える教師は絶対的少数である。

1、2学期、これまで体育の授業を行ってきたが、決められた課題を黙々と行うことはできても、他人との関わりの中で教え合い、学び合うことを苦手としている。一斉指導では動けても、グループ学習では主体的に動けないという実態がある。この辺りを実践を通して少しでも改善していきたいと思う。

4. 実践のねらい

①平均台運動の教材としての可能性を探る。

・連続技としての平均台運動の可能性 ・前転はマット運動の側転に相当するか

②採点に対する子どもの興味・関心を探る。

実践の大まかなイメージは、高学年マット運動の学習をモデルとする。演技を作ること、そのための技集めと、技の習熟、そして、演技の採点が主な学習内容である。学習の流れとしては、①技集め→②技の習熟(主に前転)→③演技構成を考える→④演技の習熟→⑤発表会(採点)となる。高学年マット運動で教える内容が、平均台運動でどこまで通用するのかを、実践を通して考えてみたい。

5. 実践経過(全17時間) 実技12時間 教室5時間

時	日	内容	教えた技術的内容や実践の概要など(発)-発問
1	11/1 教室	オリエンテーション	・3枚の写真から歌うために乗る台ではないことを知る。 ・北京五輪のビデオを観て平均台運動とはどのような競技なのかを知る。
2	11/1	技集め 移動	・歩く・つま先歩き・走る・横歩き・しゃがみ歩き・後ろ歩き (発)足元を見ないで移動するにはどうすればよいか？
3	11/8	技集め ジャンプ・バランス	・予め一人一人が教室で考えた技を実際に試す。 ①準備運動(前時の技)②バランス技(発表) ③ジャンプ技(発表) (発)バランスで3秒止まったり、落ちずにジャンプするためには、どのようなことに気をつけたらよいか？
4	11/15	技集め 上がり技・下り技	・予め一人一人が教室で考えた技を実際に試す。 ①準備運動(前時の技)②上がり技(発表) ③下り技(発表) (発)正確に平均台に上がったり、動かずに着地するためには、どのようなことに気をつけたらよいか？
5	11/22	前転	①準備運動②バランス技(三角バランス、アンテナ)③ マットで前転④跳び箱で前転⑤平均台で前転 (発)落ちずにまっすぐ前転するためには、どのようなことに気をつけたらよいか？
6	11/29		
7	12/13 教室	演技づくり	①学習してきた技の整理(難度別に分類) ②連続技づくり ・平均台2往復の演技 ・(上がり技、下り技、前転、バランス、ジャンプ、ターン)を演技の中に必ず前転を入れる。
8	12/13		①前転の練習 ②演技の完成(覚える) 机上で考えた技ができるのかどうかを試す。 演技の修正
9	12/20		
10	1/14	演技づくり(採点)	①前転の練習 ②演技の完成(採点) 机上で考えた技ができるのかどうかを試す。 演技の修正 グループ内で演技に採点をする。
11	1/21		
12	1/28		
13	2/4	演技の完成	発表する演技の確認
14	2/18	発表会	グループごとに発表し、ビデオを撮る。
15 16	2/25 教室	演技の採点	ビデオを再生して採点する。
17	2/28 教室	学習のまとめ	これまでの学習のビデオを観て、感想を書く。

(1) オリエンテーション<教室> つかみはOK!

この時間の大きなねらいは、平均台がどのような運動であるのかを理解することであった。これからの体育で何をするのかを知らせず、初めに3枚の写真(6年生を送る会で6年生が歌っている場面)からまちがいさがしを行った。そして、子どもとのやりとりの中で、平均台は音楽会などで、後ろの人が見えないから、その上に立って、台がわりに使用するものではなく、本来は器械運動の一つであり、美しさや技を競うものであることを知らせた。

実際の体操競技の女子平均台、北京オリンピックの一位(ジョンソン)二位(リュウキン)二人の選手の演技を見せ、高さ1.2m、長さ3m、幅10cmで演技することを知らせた。そして、平均台運動とは

・器械運動の一つの女子競技であること。(かつては男子も行ってたこと)

・上がり技、中技、おり技のある連続技であること。(マットや鉄棒と同じ)

・ジャンプ、ターン、バランスを含んでいる。

を知らせた。そして、「みんなにはバク転などは無理なので、前転をやってもらいます。」と言った所、「そんなの無理」と言う声がかえってきた。

平均台と言うだけで不満の声が上がると思っていたが、予想に反して、興味を持ち、好意的に受け止めてくれたようである。

(2) 技集め 結構のつてきている

①移動 11/1

初めての平均台の学習内容は、移動であるが、歩く、走るに変化をつけて、それが出来たかどうかをグループ内で確かめさせた。歩く(ふつうに、大またで、ももをあげて)つま先で歩く、走る(ふつうに、つま先で)横歩き(ふつうに、足を交差させて)しゃがみ歩き、後ろ歩きなど、いろんな歩き方を試した。評価は○△×の三段階である。

また、観察だけでなく、授業で大切な技術ポイントを見つけさせるために発問を投げかけた。

<発問1>

(課題)足元を見ないで(視線を台のはし)移動するにはどうすればよいのだろう？

→(正解)平均台の腹を足でたどって移動する。

<ノートの記述>

・足を前にして平均台があるか確認する。・足を伸ばしてくずれないようにする。

・集中して歩く。・顔を固定して歩く。・目線をまっすぐにする。・一歩ずつ確かめて歩く。

わかりにくい答えもあるが、平均台の上を実際に歩くことから、大切なことを見つけたようだ。体操競技の指導書には、体操選手は足元を見ないで移動するために、足で平均台の横を沿わせて一歩一歩確かめながら移動するらしい。これに慣れていくとまっすぐに顔を上げ、目線を平均台のはしやその前の方に置いて移動できるようだ。しかし、これを初めて経験する子どもに対して

よかったのかどうか、適切な発問であるとは思えない。それよりも、子どもが書いたように、移動する所をしっかりと見ることなど下線部分を大切なポイントとしてまとめた。また、この時間では、両手をしっかりと開いて移動することと同じリズムで移動することの2点を強調したが、感想にそのことについては触れられていなかった。

②ジャンプ・バランス 11/8

演技を構成するための技集めの学習に入る。ジャンプ・バランス技について予め出来そうな技を教室で考え、それが出来るかどうかを体育館で試し、発表するという授業の流れである。

一人一人が考えた技を、グループの全員が試す。「できる○ーできない×」の判断基準は、明らかに無理なのが「できない技」、だれもができたり、今はできなくても練習したりしたらできそうな技を「できる技」とした。

▽バランス/V字バランス、三角バランス、片足バランス、アンテナ、水平バランス、足あげバランス、アンテナおこし、命バランス、ケンケンからバランス、テレビを見ているおっさんバランス、えびぞり、組体バランス)

▽ジャンプ/その場片足ジャンプ、ジャンプ半ひねり、つま先ジャンプ、ジャンプ半ひねり連続、開脚ジャンプ、片足ふみきり片足着地、横向き半回転、足パンジャンプ

バランスとちがって技に限られた。と言うのも、ジャンプして体をひねるのは180度までしか無理であり、一回転を机上で考えたがやってみると無理(危険)な場合が多かった。発表の時に、一回転をした子どもがいたが、両足を開いて着地しており、できないことがわかった。

<発問2>

(課題) バランスで3秒止まったり、落ちずにジャンプしたりするためには、どのようなことに気をつけたらよいかを考えよう。

<正解> バランス→両手を広げてバランスを取る。ジャンプ→足元をしっかりと見て着地する。

◎バランス

<ノートの記述>・両手をしっかりと広げる。しっかりと下を見る。足のつま先まで力を入れる。激しく動かない。視線をずらさない。

◎ジャンプ

<ノートの記述>・着地の時にバランスをくずさないように真上にとぶ。足をおく所を確認する。着地の時に平均台の真ん中に着く。足をからめないように気をつける。

授業が終わると教室に帰り、すぐに感想を付箋に書いた。それを、誰もが見られるように窓に貼り、その日にうちに丸打ちと、特徴的な感想は学級文集に載せた。

③上がり技、下り技 11/15

前時と同じ流れで、教室で技を考え、体育館で実際にやってみて、できるかどうかを確かめた。下り技に比べて、上がり技は少なかったようだ。

前の時間から気になっていたことだ、一つの技をした後に、平均台から落ちる人が多かったことだ。平均台は落ちてはいけない運動だということを意識させるためにも、準備運動の段階で試技回数と落ちた回数を記録させるようにした。

▽上がり技/・両足上がり ・片足上がり ・半回転片足上がり・後ろ向き両足上がり・またぎのり

技に限られたが、後ろ向きから上がった、平均台をまたいだ状態から始まる技など、工夫が見られた。

▽下り技/助走ジャンプ下り ・側転下り ・ロンダート下り ・半回転おり 一回ひねり下り・開脚下り ・片足跳び両足着地

これも技に限られてきて、ひねりを加えるぐらいだった。着地を片足でする子どもがいたので、着地は両足であることを知らせた。また、着地をした後のポーズのない子どももいるので、しっかり演技の終わりが分かるようにポーズを取らせた。

<発問3>

(課題) 正確に平均台に上がったり、動かずに着地したりするためには、どのようなことに気をつけたらよいかを考えよう。

<正解>→足の着く位置をしっかりと見る。

◎上がり技

・しっかりと平均台のある場所を把握してからのぼる。かんたんな技を選ぶ。体重を足のつま先にかけて、しっかりとジャンプしてのぼる。自分ののる所をしっかりと確認する。

◎下り技

・ちゃんと両足で下りる。着地の時に早めにポーズする。下を見ずに前を見る。高くジャンプして、両足を地にしっかりとつける。

(3) 心が折れた前転 (実践への意欲を失う) 11/22、11/29

平均台の核となる技に本時から挑戦する。そのために、次のようなことを考えた。

①腰の位置を高くした前転の習熟。(回りに行くという意識ではなく、腰を高くして、頭を入れた結果が前転という捉え方。)そのためにも、三角バランスが必須である。三角バランス、三角バランスからの前転を行う。

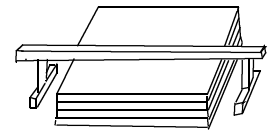
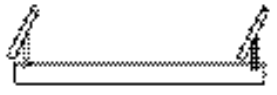
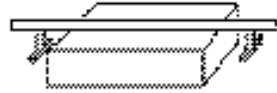
②前後に足を開いて立つこと。(平均台で幅が狭いため、足を前後に立つように)安定したアンテナとアンテナからの直立

学習の順序として

1. 三角バランス ・3秒静止・さらに腰を上げた三角バランス(いずれも平均台で)
2. アンテナ ・3秒静止(平均台)・アンテナからの直立(マットで→平均台で)
3. マットで前転 ・前転で直立(足を前後にさせる意識)・三角バランスから前転
4. 跳び箱3台をつないだ上で前転

5. 平均台で前転 ・裏返した平均台で・ウレタンマットに平均台をのせた上で・平均台の上でという流れを考えていた。

はじめは、ウレタンマットの上に平均台をのせてやろうとしたが、ウレタンマットに平均台をのせると、平均台が不安定になり、その上で前転など到底できなかった。これはダメ。また、高さが問題であるから、平均台を逆さまに向けてその間で前転を試みたが、これも、平均台が短くて前転をしようとしたら足が当たってしまう。これもダメ結局、平均台の下にうすいウレタンマットをしいたものと、マットを四枚重ねたもので場づくりをして前転の練習を行った。



初めての前転を見ていると、三角バランスからなかなか前転に行けない子どもが多かった。やっとの思いで前転をしたものの、子どもはとても痛そうにしていた。と言うのも、多くの子どもの前転が、腰が低い位置から勢いをつけて回りに行っているようで、なめらかな回転となっていない。平均台の角に背中をぶつけに行っているようなもので、これでは、背中が痛いのも当然だと思った。三角バランスでこしを高くして、そこから頭を入れた前転の習熟が必要であると思えた。

余りにも痛いようで、子どもが平均台の上にマットを敷いてはダメかと言ってきたので、これやってみることにした。この時間の感想を見ても、「背中が痛い」「肩甲骨を痛めた」というものが多く、真っ先に、「これは支部例会で報告できないな」と思った。前転はやはり無理なのかという失意でその日の授業を終えた。

この日、学年会があり、学年の教師にも映像を見せた所、「平均台を横に2台合わせて、幅を広くしてはどうか」という意見をもらったので、気を取り直して、早速次回に試そうと思った。

続く2回目(11/29)の前転の学習では、①準備運動 ②バランス技(三角バランス、アンテナ) ③マットで前転④跳び箱で前転 ⑤平均台で前転という順序で学習した。やはり痛さは変わっていない。見ていると、やはり腰の上がない状態から前転をするので、頭の後ろでなく、頭頂部が平均台に付くことになる。それも勢いで回ろうとするから、余計に痛いだらう。それで、三角バランスからゆっくり回りに行くように指導した。また、2本合わせた平均台で練習すると、回れるようになる子どももいて、跳び箱を繋いで練習するより有効だと思えた。

この日は、ブロック委員会があり、前転までの様子をビデオを中心に観てもらった報告した。平均台の前転で痛がっていたことに対しては、ダンボールの平均台を作ることや、ベビー用品の緩衝材なども使ったらいいという意見をもらって、大変参考になった。そして、段ボールの平均台を学級で作ることにした。

〈4〉演技の構成〈教室〉 ー平均台の演技づくりー

ジャンプ、バランス、上がり技、下り技、前転と一通り学習したので、今度は、それらをつないで、一つの演技を作ることを知らせた。その前に、これまで学習してきた技を難度順に分類した。(Aーかんたん Bーちょっと難しい Cー難しい Dーかなり難しい)の4つに子どもと問答を通

平均台難度表



	A(かんたん)	B(ちょっと難しい)	C(難しい)	D(かなり難しい)
上がり技	・またぎのり ・つま先走り ・片足上がり(片→片) ・両足上がり(両→両)	・両足後ろ上がり ・半回転両足上がり ・半回転片足上がり ・片足上がり(ひざ伸ばし)別名(両川) ・開脚上がり	・開脚上がり	
移動	・後ろ歩き ・交差歩き	・つま先後ろ歩き ・動物歩き ・しゃがみ歩き	・しゃがみ後ろ歩き ・しゃがみ動物歩き	
バランス	・三角バランス ・片足バランス ・命バランス	・テレビをのぞくおじさん バランス 別名(西田) ・水平バランス ・V字バランス ・アンテナバランス ・組体バランス ・はらけV字バランス ・あおむけバランス	・アンテナバランス(手なし) ・V字バランス(手なし)	
ジャンプ	・両足半回転	・両足半回転連続 ・片足ジャンプ片足立ち 別名(中井)	・開脚ジャンプ ・両足1回転ジャンプ ・足バシジャンプ ・ジャンプ足こぎ ・伸身ジャンプ	
ターン	・両足半回転	・片足半回転 ・両足一回転	・すわって一回転	
下り技	・助走ジャンプ下り	・半回転下り ・開脚下り	・側転	・ロングダート
その他				前転

して、これまで発表してきた技を分けた。

次に、演技を作っていく。

- ①2往復の演技を作る。(4つの場面)
 - ②技を全部で十五以内に入れる。
 - ③バランス、ジャンプ、ターンを入れる。
 - ④どこかに前転を入れる。
 - ⑤自分の見せ場を作る。
- また、上がり技から始まり、下り技で終わること、この中に、前転、バランス、ジャンプ、ターンを入れること、全部で十五(上がり技、下り技を除くと13)の技を入れた構成を考えさせた。

できた演技を見ると、まず、往復の4つの場面の技を作ると言っているにも関わらず、技の方向などがわからなかったようだ。自分を演技の中に置いてみるのが、こんなに難しいことなのかと思った。しかし、机上のプランを実際にやってみて、間違いに気づかせたら良いと思ったので、教室で各自が作った演技に関しては、何も言わなかった。

(5)演技づくり 12/13 12/20

この時間以降は、前転の習熟と演技づくりが学習内容となる。前半が前転の習熟、後半が演技づくりである。

平均台の演技を教室で作る、実際にそれができるのかどうかを試した。上がり技から始まり、ジャンプ、バランス、ターン、そして、前転を入れた中技、そして下り技で終わる連続した演技である。

教室で考えた演技を実際に試した所、できないことや、もっとできそうなことがわかってきたようだ。例えば、一回転ジャンプを確実にするために、半回転にするとか、上がり技をやさしくするなど修正が見られた。一方、バランス技がもう少し難しい技ができそうなので、難度をかえてみようという子どももいた。演技を行い、何度も修正を加えることがこれからの学習でとても大切であることを強調した。

(6)採点 1/14 1/21 1/28 2/4

グループの中で、友達の演技に採点した。持ち点から、減点して演技に点数をつける。持ち点は、技の何度を4段階に分け、A(1点)B(2点)C(4点)D(5点)として、自分の演技の持ち点を決めた。CDがそれぞれ、3点、4点にならないのは、CDは価値が高いと言うことで、A、Bの技とは差を付けるべきだという考えからそのようにした。

採点

・実際に演技をして持ち点から減点。

<減点>

- 4 落下 前転(-1~-4) →後に、(1~3)の減点
- 2 大きなふらつき
- 1 小さいふらつき・着地が動く・ポーズを取っていない・3秒のバランスができていない

<加点>

+1~+2 全体的に美しい演技・大きなジャンプ・前転で立てる・やわらかさ

初めてグループの中で、メンバーの演技に採点をしたが、実際に点数をつけるのは難しかったようだ。少しでも動くと容赦なく減点するため、持ち点がなくなってマイナス点になる子どもも出た。採点の基準をみんなで確かめる必要があるように思えた。

また、演技の持ち点であるが、人によってっておりバラツキが見られた。子ども達は10~最高15の演技を入れて演技を作っているが、難しい技をたくさん入れてとても持ち点の多い子ども、反対に、持ち点が少ない子どももいる。難しい演技構成で高得点をねらうか(減点がカバーできるものにするか)、優しい構成で着実な演技を目指すのかは、子どもによって違うが、バラツキは少ない方がよいと思うので、持ち点の低い子どもに対しては、持ち点を25点以上になるような構成にするようアドバイスした。

いつも、ふざけている子どもが数人いるが、今回は友達の演技を採点するとあってか、非常に真剣に取り組んでいた。

2名の女子が前転ができていなかったで、昼休みに体育館で前転の練習をしたところ、クラスの半数近くの子どもが参加した。できなかった女子2名もなんとかなるようになった。ただ、マットを下に敷いて前転をすることは、恐怖心が取り除かれて、安心という心理的な面と、落ちてもしようがないという安全面から考えたら有効であるのだが、高い所で演技をする所に平均台の醍醐味があるわけで、慣れ来たら、下にマットを敷かないで前転をするように指示した。

前転に関しては、ゆっくり回ることで、痛さを和らげることができるようになってきた。「痛い」とい

平均台採点表	名前	谷田 未来	採点者	阪口 友梨
持ち点	A B C D	29 点	得点	26 点
減点	落下 大きなふらつき 小さいふらつき 着地が動く ポーズを取っていない 3秒のバランス	4 8 12 16 2 4 6 8 10 12 14 ① ② ③ 4 5 6 7 8 9 10 1 1 2 1 2 3 4 6 8	前転 (1 2 ③ 4)	
加点	美しい演技 大きなジャンプ 前転で立てる やわらかさ	④ +2 ⑤ +2 +1 +2 ⑥ +2		
<p>(ふざ) ~ 前転で落ちたこと以外ほぼうまくできていた。バランスがすごくきれいでした。</p>				

う声も余り聞かれなくなり、前転を演技の中で成功させようとする場面が見られた。また中には、前転から次の技につなげる子どもも出てきた。

また、落下の4点減点はきついということで、最大3点とし、落下の内容から減点するようにした。例えば、平均台では落下は一番の減点だが、片足をついてしまうのと、両足をついてしまうのでは違うし、前転から落下する場合とではちがってくる。それで、同じ落下でも、前転の減点(1~3)、片足が着く(1)、両足が着く(3)というふうに、落下の内容に対しての減点のやり方を変えた。

また、減点の仕方に違いがあったので、どれくらいのおふらつきならどれだけ減点するのか、実際にふらつきの例を私が演じて見せ、共通したやり方をみんなで確かめ合った。

(7) 発表会 2/18

平均台の発表会を行った。週に一回の体育館体育なので、演技を覚えたとしても、時間が経つと忘れてしまって、なかなか演技を覚えられなかった。不安な子どもは昼休みに体育館で数回、練習するようにした。

発表会では、全員が平均台の演技を発表し、みんなで演技を見た。前転を成功させる人は少なかったが、少し足をつくだけの人、前転を回った後で落ちた人など、前転がたいへん上手になってきたのがわかった。また、バランスでは、まっすぐに手足を伸ばしたり、三秒確実に止まったりするなど、細かい所まで気をつけて演技をしていた子どももいた。演技をするときはみんな緊張していたようだが、いつもより上手にできたという感想が多かった。

平均台採点表	名前	阪口 友梨	採点者	久野
持ち点	A B C D	35 点	得点	33 点
減点	落下 前転 両足が着く 片足が着く 大きなふらつき 小さいふらつき 着地が動く 不十分ポーズ(初めと終わりも) バランス(3秒静止)	3 6 9 12 15 18 21 24 ① 2 3 4 5 6 7 8 9 10 2 4 6 8 10 12 14 ① 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 1 2 3 4 5 6 7 8	前転 (① 2 3) (1 2 3)	
加点	美しい演技 大きなジャンプ 前転で立てる やわらかさ	+1 +2 +3 +4 +1 +2 +3 +4 +1 +2 ⑦ +2 +3 +4		
<p>(ゆり) ~ 動きがすごくやわらかかったよ。前転もキレイだったよ。足が着くことも少なかったよ。</p>				

平均台発表会	発表会	3 班	名前	米谷夕莉	
発表会の演技(最終)					
1	上がり技	移動	バランス	ターン	
検	おわり	♀	♀	♀	
技	前歩き	片足バランス	両足半回転		
難	A	A	A	A	
2		ジャンプ	ジャンプ	バランス	
検		♀	♀	♀	
技		両足半回転ジャンプ	片足ジャンプ	V字バランス	
難		B	B	B	
3	バランス	移動	バランス	ジャンプ・ターン	
検	♀	♀	♀	♀	
技	片足バランス	後歩き	両足V字バランス	両足半回転ジャンプ連続	
難	B	A	C	B	
4	下り技	移動	前転		
検	おわり	♀	♀	♀	
技	半回転あり	前歩き	前転		
難	A	A	D		
持ち点	26 点	A 7	B 5	C 1	D 1
1	26	※発表会では、最高点と最低点を除いて、残りの4人の得点を平均したものが演技点となります。			
2	23	⇒ (23+24+25+29) ÷ 4 = 23.75			
3	24				
4	24				
5	25				
6	25	得点	23.75		
【演技を終えて】					
V字バランス手直しを忘れそうになり演技が止まりました。いつも落ちない所で足を付けました。ターンの時、ふらつきがなくなったのがうれしかったです。					

＜8＞演技の採点＜教室＞ 2/25

平均台の発表会の時に撮ったビデオを見ながら、演技の採点を行った。

そして、ビデオを見ての採点。採点者は、4人か5人(各班から一人ずつ交代)＋教師で行った。減点だけではなく、「美しい演技、大きなジャンプ、前転で立てる、やわらかさ」などがあれば加点となる。得点は、最高点と最低点を除いた平均点が演技の得点とした。最終的にできた採点表は上の表のようになった。

落ちる－落ちないことで、前転ができた－できないという判断ではなく、前転の質(例えば、まっすぐ回れたけど最後に足をついていた。回れたけど前転をやった後に落ちたなど)を捉えて採点することができるようになってきた。

＜9＞学習のまとめ＜教室＞ 2/28

これまで行ってきた授業中に撮ったビデオを観ながら、平均台の学習を振り返った。また、まとめの感想として、①わかったことやできたこと、②グループ学習について、③採点について、書かせた。また、これとは別に、「平均台の授業でどんなことを学んだか？どのような運動だと思うか？」ということも聞いた。

＜感想(アンケート)の結果から＞

①平均台の授業は楽しかったか。(楽しい←5～1段階→楽しくない)

・とても楽しい(8)わりと楽しい(8)どちらとも言えない(11)あまり楽しくない(5)楽しくない(2)

理由△(複数回答)

・前転ができたから(8)・演技を考えてやるから演技を終えた達成感。(5)・技ができた。うまくなった。(3)・バランス感覚がよくなった(2)・バランス技が楽しい。(2)

理由▼

・前転が痛い(10)・失敗したらはずかしい。(3)・こわい、勇気が出ない。(2)・発表がある。(1)

②グループの教え合いはできたか。(できた←5～1→できない)

・とてもよくできた(1)・できた(11)・どちらとも言えない(3)・あまりできない(10)・全くできない(3)

③採点をする事について(よかった←5～1→よくない)

・とてもよかった(10)・よかった(9)・どちらとも言えない(10)・よくない(3)・全くよくない(2)

理由△(複数回答)

・採点が楽しい。減点や加点が楽しい。(4)・採点されることで自分がどの位できているのかがわかる。(2)・自分の実力がわかる。(2)・客観的に自分の技を見直せる。(1)・次にどこを直せばよいのかがわかる。(1)・演技を考えるのが楽しい。(1)・友達演技をしっかりと見られる。(1)

理由▼

・点数が低かったらいや。(2)・点数に差が出ていじめにつながる。(1)・採点されて点数がわかるの

がいや。

④平均台の授業でどんなことを学んだか？どのような運動だと思うか？(複数回答)

・バランス感覚が身についた。(15)・みんなで教え合える。グループで協力できる。(8)・平均台の正しい使い方、本来の使い方がわかった。(3)・演技力、演技を試す力。(3)・勇気、努力、根性を試す。(2)・人のいい所を見つけられる。(2)・友達を励ます優しい心(1)・採点力(1)・落ちたら痛いということ。(1)・こわくてもやれる。(1)・痛くても努力すればできる(1)・痛さに耐えられる心(1)・平均台は必要ない。(1)

6. 実践を終えて

(1)技術的内容

①前転はマット運動の側転に相当するか

初めは、絶対無理だと言っていた前転は、全ての子どもが出来るようになり、また、演技の中の一つの技として行えるようにもなった。一番時間をかけて行ってきた技なので、子どもたちの感想に前転に関する記述が多いのは当然であるが、できるようになったことに喜びを感じている子どもが多い。また、前転が「できる－できない」が、「落ちる－落ちない」という判断から、前転の出来具合(例えば、回れたけど最後に足をついた。前転は出来ていたけどゆがんだから)という前転の質で判断できるようになってきた。前転という高い目標に向かって習熟することで、技を見る眼が育ってきたのではないと思う。また、前転が上手に回れる＝痛さがなくなることであり、上達具合が痛さでわかるという点でも、前転を取り入れたのは良かったのではないと思う。

しかし、前転はマットの側転と比べ、技を獲得するためのスモールステップがほとんど乏しく、アンテナから脚を前後にして立つなどの指示はしたものの、下位の技(マットであれば、うさぎの足打ちやゾウさん)からの発展性はなく、勇気や根性などの精神的な指導になってしまった。連続技との関連については次項で述べることにする。

前転の技術ポイントとして、「三角バランスで腰を高く上げから回る」ということを強調したが、これは子どもが発見したものではなく、教師から一方的に指示したに過ぎない。ただ、前転は「腰を高い位置で保ち、その結果が前転となる」という捉え方は、平均台でより一層確かめられた。

②連続技について

マット運動よりも単一技に限られているため、学習の中心は、演技構成を考え、それを習熟していくことだった。簡単な技をつないでも、人の目を惹く技になることは連続技の構成を考える上で、知ってほしい内容である。平均台で、子どもたちが作った演技構成を見ると、やはり、単一技を並べたものにしかっていない。発表会の演技では、自分の演技の見せ場を作ることを指示はしたものの、教師の側が、どんな連続技が価値のあるもの(例えば、反転ジャンプの連続など)なのかを示しておらず、また、それを演技で行う子どもの演技に対して、全体で紹介することもなか

った。この部分の働きかけがあれば、もっと内容のある演技構成ができたかもしれない。

また、マットの側転では、その前後に技を加えることで技としての広がりがあるが、前転の場合は、落下することがほとんどなので、技が途切れてしまい連続技を構成する核となる技としては無理がある。

③採点について

子どものアンケートからわかるように、採点は面白かったようである。採点をしようと思えば、それだけ人の演技をしっかり見ないとできないので、10時間目以降は、自分の演技以外の時に遊び回る子どもも減ってきた。

初めての採点では、演技をした得点がマイナスになる子どもも数人いたが、採点基準についての共通理解を図ることを通して、ほぼ同じ尺度で採点ができるようになってきた。

子どもの感想の中に、持ち点と、演技点を比べて、減点幅で自分の演技の善し悪しを判断していた。また、演技の完成を目指して習熟する中で、採点を繰り返すことによって、グループの周りの子どもも演技を覚え、その子どもがつまずく所をしっかり見たり、細かい部分まで見たりできるようになってきた。グループ内での採点→発表会での採点という学習の流れは良かったと思う。

④グループ学習

アンケートの結果からわかるように、教え合いが成立していたとは言えない。教師が特に指導しているということもないので、その結果が表れている。ただ、採点を行うようになってからは、グループの友達の演技をしっかり見るようになり、友達の演技に対するアドバイスも増えてきた。

(2) 平均台運動の教材としての可能性

「楽しい体育」ではないのだから、子ども達の情意を教材の価値判断とするのはおかしいかもしれない。それに、子どもが「楽しいかどうか」を判断する基準が、他の教材と比べてみたり、体育と言うだけで「楽しい」と感じる子どももいるので、実体の知れない「楽しさ」をアンケートで問うこと自体おかしいかもしれない。しかし、やったこともない平均台を子ども達はどのように受け止めたのかを知りたいと思い、このような聞き方をした。

①平均台は楽しかったのか？

楽しい理由の一番に挙げたのは、前転であり、楽しくない理由の一番目に前転(こちらは痛さ)を挙げている。この結果をどう見るかは、判断できないが、前転が大きな判断基準になっている。

②平均台で何を学んだのか？

また、何を学んだのかという問いに対しては、バランス感覚を挙げているが、この質問を問うたとき、「何を書いて良いのか？」と聞かれたので、「平均台でどんなことが身についたの？それを思うままに書いてほしい」と言った所、「身についたとしたら、バランス感覚かな？」と一人が言ったので、それに引きずられた形で理由に書いた者が多いと思われる。バランス感覚は平均台の授業で良くなるとわかるものなのか、実感としてわかるものなのかは大いに疑問である。

次に挙げていたのが、「みんなで教え合える。グループで協力できる」ことである。グループ学習にはほとんど力を入れていないが、採点するという活動を通して、友達の演技に向き合わなければならない状況に置かれたということもあり、それが、教え合いにつながったのだろう。

そして、「勇気、努力、根性を試す」こと。これは、前転を用いたことによって、こういう内容が出てきたのだと思うが、平均台という運動自体、競技者であっても、これは味わう感覚ではないかと思うのである。平均台は常に落ちるといふ恐怖と闘いながら演技を行う、高さで失敗すると痛いという恐怖にどれだけ耐えられるか、そんな楽しみ方をする運動ではないか？ある意味、平均台の特質に触れられたのではないだろうか。

○平均台運動を通して

- ①演技を採点することは、高学年の器械運動の学習内容として、とても有効である。平均台の学習を通して、実証されたのではないだろうか。
- ②できそうもない前転を高い目標とし、その完成を目指して学習したことは、結果的には良かったが、前転が側転のように段階を経て取り組めたり、連続技を構成する中核の技であるかどうかは疑問である。
- ③連続技として取り組むのであれば、どんな技と技の組み合わせやシリーズがあるのかを、前もって指導者がイメージを持つべきである。この教訓を、マット運動に生かすべき。